

《チェルノブイリ原発事故》 被害はどう出たのか？

第2回 ウクライナ調査報告



(2012年5月27日～6月5日)

NPO 法人 食品と暮らしの安全基金
(旧称：日本子孫基金)

〒338-0003

埼玉県さいたま市中央区本町東 2-14-18

TEL 048-851-1212 FAX 048-851-1214

ホームページ：http://tabemono.info/

衝撃の大発見！

年間1ミリシーベルト 低レベル汚染地域で子どもに健康問題

第2回調査では、まず子どもの医療支援を行っている団体「ザポルーカ」を訪問し、『食品と暮らしの安全』読者のみな様からの募金を、6000ドルを贈呈しました。

(円からはウクライナ通貨に両替できないので、今後もドルかユーロで渡します)

放射能が孫世代に被害を出しているかどうかの調査は、8つの村を訪ねて、14家族61人について聞き取り取材し、放射能による健康被害が出ていることを確認しました。

放射線の人体影響の研究は、ガンに圧倒的な重点が置かれ、心臓病、白内障、遺伝病も研究は行われていますが、それ以外の健康問題は、ほとんど調査されていません。

ウクライナの田舎で聞き取り調査すると、さまざまな健康問題が生じており、足首や関節が痛いケースの中には遺伝的な健康影響が疑われる子ども（孫世代）のケースもありました。

大人の世代では、事故から10年～15年後に健康が悪化していく傾向がありました。

学校を訪問しての取材では、小学生の大半が、何らかの健康問題をかかえていることが判明しました。この地域の20カ所を計測すると平均線量が毎時0.115マイクロシーベルト（年間1ミリシーベルト）。

しかし、ここまで放射線レベルが低下しても、そこで自給的な食生活を行うと、子どもの健康に問題が生じていたのです。これは、衝撃的な大発見といえます。

日本政府は年間20ミリシーベルト以下、つまり毎時2.28マイクロシーベルト以下は「健康に影響が出ない」として、村への帰還を認める方針です。しかし、これでは、自給的な暮らしをする村民の子どもは、健康が害されるのです。

日本だけでなく、国際的な食品の安全規制がまったく不十分であることを強く示唆する調査結果が得られたので、日本人が将来も健康に暮らすことを考えるならば、日本政府はウクライナで健康調査と放射能の調査を行い、その結果をもとに、農作物の作付制限を行ったり、食品の放射能基準を強化したりしなければならなくなった、といえます。

<5月27日(日)>

成田発 → モスクワ → キエフ

<5月28日(月)>

【ウクライナ・チェルノブイリ連盟を訪問】

チェルノブイリ原発事故のとき、事故処理にかかわった人たち（リクビダートル＝決死隊などといわれる）の団体を再訪。

■ユーリー・アンドレーエフ代表と会見



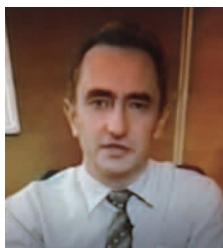
・「福島では、原発から撤退しようとした人がいると聞いてショックを受けた。私も、事故のときに子どもが頭に浮かんだ。それでも現場にいられない人は原発に在るべきではない」

・9月ツアーの講演会は、9月26日と決定。

・アンドレーエフ氏が、事故前に働いていた

チェルノブイリ原発2号炉の視察ができるよう協力してくれることになった。通常、2号炉は外部の人に見せていない。

・事故当時の原発を空撮したヴァレーリー・マカレンコ氏がスタッフとしていたので、事故後の写真の前で記念撮影。



・事故時の映像を入手し、両氏から使用許可をもらった。ウクライナ・チェルノブイリ連盟のDVD中になかなり前のアンドレーエフ氏が映っていた。

【調査メンバー】

小若順一（団長）

林 克明（ジャーナリスト、企画・記録担当）

趙 華行（ジャーナリスト、ビデオカメラ担当）

通訳：パレンチーナ・モローソフ

【子どもの医療支援を行うザポルーカを訪問】

■国立がん研究所・付属病院

・子どもの治療支援を、ザポルーカは、国立がん研究所の付属病院でも行っている。

・入り口で、1986年4月26日の原発事故の日

に生まれたオクサーナさんのお主人が診断書を持って走って出て行くのに出会った。娘ソフィア＝ドブガニユクちゃん（神経芽腫、2009年10月31日生まれ）の検査結果は、再発がなかったとのこと。その後、両親とソフィアちゃんは、入口で医師の説明を受けていた。



・ここでは2人の医師の給与を支払い、医師の一室にザポルーカの現場事務所を置いている。

・エレン・シャイダ医師（研究員）が病院を案内してくれた。

・入院している患者の部屋に入り、挨拶して、ネックレスを配り、ビーズの編み物

を置いていた女子高校生ぐらいの子に、ネックレス作成キッドを渡したら、さらに喜ばれた。

・今回は医療機関での取材はしなかった。



・リハビリ室を見学できた。

・「国立がん研究所の付属病院は、資金的に苦しく、足りない医療器具をさまざまな支援団体の援助によって入手している。ザポルーカは有力な支援団体である」

・ザポルーカの支援でガンが治った子どもが、障害者スポーツ大会に、昨年は10人、今年は8人参加した。



・ザポルーカ現場事務室で「食品と暮らしの安全基金」読者からの寄付金の一部6000ドルを贈呈し、記念撮影。

■ザポルーカの本部事務所訪問

二部屋あり、一部屋はスタッフの執務室。もう一部屋は図画工作ができる多目的室で、ボランティアが何かを作っていた。



元気になった子どもたち

■「家族の家」再訪

田舎から来て、キエフの専門病院で子どもを治療する際に家族が無料で宿泊できる施設をザポルーカが運営している。

この「家族の家」を再訪する。

3月1日と3日に訪問したときは雪景色だったが、今回は、広い敷地内は芝生のような草が広がり、そこにテーブルと椅子が置かれ、何組かの母子がくつろいでいた。よく見ると、前回、出会った親子がそろっていて、体調が悪かった2人の子どもが仲良く椅子に座っていて、それから、元気にはしゃぎ始めた。あつけにとられていた我々4人は、感動で胸が震えた。

お母さんたちに報告書と絵本を渡すと熱心に見てくれた。



再会した母子は次のとおり。

◎デニス＝キリチュク君（左腎臓にウイルムス腫瘍、2005年8月2日生まれ）

前は髪がなく厚いマスクをして体調が悪かったが、今回はマスクをせずに、自転車を乗り回した。



◎ユーリヤ＝サフチェンコちゃん（腎臓芽腫左3級、2006年5月24日生まれ）

前は体調不良で機嫌が悪く、写真を嫌がったが、今回は庭のブランコで声をあげて遊び、自転車に乗り、写真も嫌がらなかった。



◎エミール＝スコチ君（腹の神経芽腫、副腎障害、2009年4月23日生まれ）

エミール君だけは、家族の家に滞在し続けて化学治療を受けている。よくしゃべり、前回より元気そうに見える。他の子どもたちは家に戻り、治療や定期検査のためにキエフにやって来た。

◎ソフィア＝ドブガニユクちゃんも、病院から戻ってきたが、すぐに寝てしまった。



・食堂でお茶とケーキ。子供たちはとても仲が良く、しゃべったり笑ったりで、3月に来たときとはまるで違う状況だった。



・9月のツアーで再訪するときの内容についてナターリヤ・オニプロ・ザポルーカ会長と打ち合わせを行い、以下の概要が決まった。

本部事務所 → がん研究所内の事務所 → ザポルーカで講演 → 通訳ヴァレンチーナ＝モローゾヴァさんの娘のバイオリンコンサート → 交流

現地調査へ

<5月29日(火)>

【エルコフツィー村(キエフ州ペレヤスラフ・フメリニツキー地区)訪問】

原発から20km以内にあったヴェスニャーネ村から移住した人が住むエルコフツィー村は原発から東南に200kmほど離れているので、放射能汚染は少ない。

この日からは、タチアナ・アンドロシェンコさんの協力で取材することができた。



家族1



祖母(母): ガリーナ・カランジーナ(1967年8月6日生まれ)

息子(息子): オレグ(1986年5月1日生まれ)
 工作中で不在

息子の妻: カーチャ(1989年11月31日生まれ)
 子(孫息子)1: イヴァン(2010年6月12日生まれ)

免疫力が弱く、医者から予防接種を止められている。

子(孫娘)2: ソフィア(2011年12月22日生まれ)

【息子が仕事で不在のため、その妻と母親に話を聞く。庭のテーブルで話し、自家製のイチゴなどをご馳走になる。黒い犬と猫がいた】

◎祖母のガリーナさんは、事故当時18歳で妊娠中。原発労働者の街プリピャチ市から17～20kmのヴェスニャーネ村にいた。

5月1日に隣村のボレスコエの病院で出産。自宅に戻り2日間を過ごし、5月4日に新生児だった息子をつれてキエフに逃げた。その後、いとこの家で2ヵ月過ごし、夫の母が住むクリミアに移った。

8月に、このエルコフツィー村に移住した。

エルコフツィー村では、店で買う食料品は無料で得られた。

祖母ガリーナさんの話

「放射能についての教育はなく、あまり知識がなかった。事故から1ヵ月くらいたったとき、地元の食糧を食べないような表示が設置された。それでもリンゴを食べたりしていた。もちろん外から運ばれた食糧が店には置いてあったが、1986年は、イチゴもほかの果物も野菜もすばらしい出来だった。

孫のソフィア(母はカーチャ)は難産だった」

◎ガリーナの母(つまり曾祖母)はノーヴィミール村で、事故後すぐ亡くなった。

◎ガリーナの父(つまり曾祖父)は電気関係の仕事をしていた。

ガリーナたちの話によると、1990年くらいから移住者のなかで、若くして死亡する人が増えていった。

心臓病、ガン、貧血などに苦しむ人が多くなったが、専門家は「チェルノブイリ原発事故があったから、当たり前だ」と言った。

この村があるペレヤスラフ・フメリニツキー地区は放射能で汚染されておらず、自然環境がいいので移住してきた村が多い。

家族2



曾祖母(祖母) マリーヤ・デミジェンコ (1941年8月30日生まれ)

祖母(母): リュドミーラ・サモイレンコ (1965年9月27日生まれ)

長女(娘): エレーナ・モロシュタン (1985年3月19日生まれ)

子(孫娘) 1: エレーナの長女エフゲーニャ (2009年5月11日生まれ)

子(孫息子) 2: エレーナの長男(第二子) コーリヤ (2012年3月24日生まれ)

二女(娘): スヴェトラーナ・サモイレンコ (1986年10月13日生まれ) 流産繰り返し子どもなし。

三女(娘): オクサーナ・ソーボリ (1989年12月15日生まれ)

子(孫娘) 3: (オクサーナの娘) アンゲリーナ (2012年3月24日生まれ)

【ヴェスニャーネ村で強い被曝を受けた親子はエルコフツィー村に移住した】

◎曾祖母のマリーヤ・デミジェンコは事故当時、原発から17～20kmのヴェスニャーネ村にいた。午前4時に起きて乳搾りに行き、赤く燃える炎を見る。警察や軍人が現れ、ヘリコプターが上空を舞っていた。自宅は原発から直線距離で18kmくらい。

4月27日に庭へ出たら、喉がすごく痛くなった。この日、牛の首が太くなっていて、ジャガイモの害虫であるコロラドハムシが死んでいた。

◎1942年生まれの夫(曾祖父)は1989年に47歳で死んだ。血圧が高く、脚が悪くなり、定期的に病院通いするようになって、ひどいときは救急車を呼んだが、電話がないので隣の家のものを借りなければならず、よほど悪くない限り救急車は呼ばなかった。

◎その娘(祖母)のリュドミーラは妊娠3ヵ月(二女のスヴェトラーナ)で、長女のエレーナは1歳。戦争が起きたと思った。

リュドミーラはすぐ、いとこの家に避難。1986年9月にエルコフツィー村に移住した。

◎長女のエレーナ(1985年生まれ)は、血圧に問題があり心臓に痛みがある。

◎二女のスヴェトラーナは何度も流産。

◎三女のオクサーナは妊娠6ヵ月でガンを宣告される。しかしアンゲリーナ(2ヵ月)を出産した。

オクサーナの治療にはすごくお金がかかり、不妊治療などで1万5000グリブナ(15万円)かかったので、総計2万5000グリブナを借金した。

遺伝的な健康影響の疑い

◎孫の世代では、エレーナの長女エフゲーニャ(2009年5月11日生まれ)は、始終くるぶしが痛いという。母親が一時汚染地で暮らし、非汚染地



で2009年に生まれた子どもが、関節が痛むというのは、遺伝的な影響も考えられる。

【村議会議長を訪問 エルコフツィー村議会議長ガリーナ・コンドランチェンコさん】



この村の議会議長(村の民族合唱団の舞台監督もしている)を訪ね、村の概要を聞いた。

エルコフツィー村の住民1037人。

別荘があり、200人が週末にやってくる。

1986年に63世帯(農家)が移住してきた。

現在は40世帯が残っている。



【宿泊: 民宿ラッキーハウス】

<5月30日(水)>

【ストヴピャギ村】

家族3



祖母(母)：ガリーナ・ドゥボヴィチ(1947年3月8日生まれ)

長男(息子)：ヴィターリー(1973年1月9日生まれ)

長女(娘)：オリガ(1976年2月16日生まれ)

二男(息子)：ミハイル(1981年9月15日生まれ)

二女(娘)：ナジェージダ・ボジョーク(1986年4月16日生まれ)

子(孫娘)：ナジェージダの娘エヴァ(2011年11月24日生まれ)

(ほかに孫が5人、合計6人の孫あり)

【ポレスコエ村から1992年にストヴピャギ村に移住した】

◎祖母ガリーナ：「津波で一気に死んでしまうか、原発事故で苦しみを抱えて長く生きるのがいいのか、難しい選択ですね」

十二指腸潰瘍など健康に問題がある。

夫は足が痛く、前立腺炎だった。

86年5月4日に避難したが、子どもたちのこともあり新学期の始まる9月1日前にはポレスコエ村に戻った。

ガリーナは、地元産のジャガイモ、キュウリ、果物、キノコを食べた。トマトは地元産がよくなかったので、外から運ばれたものを食べた。

3ヵ月後に長女オリガは足、手が痛くなり、救急車を呼んで病院に運びこんだ。原因は不明。

屋根を洗浄したが、2日後に子どもの皮膚がむけた。

孫は6人いるが、尿の成分にアセトンが多い。

◎長男ヴィターリーの妻イリーナ(1973年2月23日生まれ)

甲状腺に問題があり、ホルモン治療をずっと続けている。胃腸も悪い。乳腺症、子宮腺腫(手術なし)。彼女の実母は乳腺腫で1999年に手術した。

外から来る作物は種類も限られていたし、少なかったので、イリーナは外から運ばれてくる食事以外に、汚染地帯の地元産も食べた。

イリーナの同級生は妊娠できない人がとても多い。31人のクラス(半数は女性)のうち4人は子どもができず、それ以外の1人は人工妊娠した。

◎イリーナの長女ユーリヤ(1991年6月11日ポレスコエ村生まれ)。

体が弱い(特に胃腸)赤ちゃんだったが、今は以前よりは良くなった。婦人科(生理不順、生理痛)の問題もある。

◎長男アルテム(1996年4月30日生まれ)は、小さいころから10歳ころまで、尿と口からアセトンの匂いがした。血液中にアセトンが多い。

痛みを訴えられる年齢になってからは、ずっと脚が痛く、天気が悪い時はとくに膝の関節が痛く、眠れないほどだった。

■村会議長を訪問 ストヴピャギ村議会議長デフコ・チモフェイさん

ストヴピャギ村の人口は1535人。

そのうち478人が移住者。1992年に265軒、756人が移住してきた。もとも



との住民と混在させるようにし、移住者を受け入れることでガスや水道などのインフラ整備をすべての村内に供給する補助を受けて、新旧の村民が仲たがいないようにした。

子供たちの夏季療養を行っている。転地療法。汚染地域からの子どもを優先するが、もともとの地元の子も参加できる。

村議会を出てタチアナが、「よその村では、移住してきた住人が住む場所だけにガスや水道が引かれて、元からいた住人と仲が悪くなっているところもある。議長が素晴らしいので、この村はそういうことがない」と説明した。

家族4



祖母（母）：ナジェージダ・ドゥブロヴァ（1948年7月24日生まれ）

祖父：バシーリ・バドルク（1937年8月15日生まれ）

脚が痛み冷え性、糖尿も。地区の病院に毎年入院（20日～10日）

母（娘）：ナターリヤ（1988年9月29日生まれ）
ナターリヤの夫、コンスタンチン・ナウメンコ（1986年11月26日）（彼の両親は1986年に死亡）
子（孫息子）：マキシム（2011年5月16日生まれ）
健康

【ヴァロヴィチ村から移住した親子3代 孫は比較的健康】

原発から35kmくらいのヴァロヴィチ村から、3km隣のブダ・ヴァロヴィチ村へ5月4日に移住。その後、ストヴピャギ村に移住した。

【コヴァリン村】

家族5

曾祖父：ヴラジミール・ジェンキーフスキー（1930か1931・故人）

祖母（母）：オリガ・シコルスカ（1959年2月22日生まれ）

母（娘）：ヴァシリーナ・リトビネンコ（1986年8月20日生まれ）

子（孫娘）：レーナ（2009年3月27日生まれ）



【故郷ノーヴィミールへ同行する親子】

祖母のオリガにはヴァシリーナを含めて4人の子どもがいる。

長女（娘）：リューダ（1977年生まれ）

長男（息子）：ニコライ（1979年生まれ）

二女（娘）：ヴァシリーナ（1986年生まれ）

次男（息子）：マキシム（1989年生まれ）

孫は6人

オリガはノーヴィミール村で生まれ育ち、原発事故によって、コヴァリン村に移住した。子どもの頃は生活が大変で、牛の世話、草刈などして親を手伝った。いまでも草刈のときの手の傷がある。

思い出の場所は墓地。毎年春4月から5月に必ず墓参りするものが伝統。必ず墓参りしなければならないほど強い伝統が今も続いている。墓に向かっていく途中で、その地区の中心であるイヴァンコフという町のあたりまでくると、いつも心臓が高鳴る。

夫は農業機械関係の学校で教えていたが、その後トラクターの運転手などをした。彼女本人は、郵便局員だった。

事故直後、喉の痛みが激しかった。キエフに行ってヴァシリーナを出産したときの検査で、甲状腺炎と判明。その後、ヘモグロビンが48になった。繊維肉腫ができ、その大きさは6～8週間の胎児ぐらいで、出血を止めるため2回の手術を行った。甲状腺の手術も医師にすすめられたが、お金がないので断った。

娘（母）ヴァシリーナ。重い病気はないが、「移住してきた人と、もともと汚染地域でない同級生を比べると、汚染地から移住してきた自分は明らかに体が弱いと思う」と話した。

孫はいまのところ大きな問題はない。



【宿泊：ラッキーハウスの女主人と妹】

<5月31日(木)>

チェルノブイリの西方地区へ移動

キエフの南東に位置するコヴァリン村からキエフ市内を通過して、ラディンカ村(直線距離で175 km)を目指した。チェルノブイリ原発の立ち入り制限区域の手前で西へ向き、およそ3時間。クラスノチ村の記念碑に着く。小さな教会があり、敷地内には移住させられた村の石碑(墓石のように見える)が配置されている。



そこから20分ほどでラディンカ村に到着した。放射線管理区域、立ち入り制限区域からは除外されているが、ここは豊かなコルホーズ(集団農場)だったので移住されたら困るので、30 km圏内に入っているのに、有力者がかけあって無理やり指定から外した。これは次の家族の主人から聞いた話である

家族6



事前調査をして、同行してくれたタチアナ・アンドロシェンコさんの知人で、地元の学校長をしていたアレクサンドル・ミハイロヴィッチ・トムチェンコさんの自宅に招かれて昼食をとった。トムチェンコさんが、タチアナさんに情報提供や協力をしてくれていた。

【元学校長の家庭で昼食】

祖母(母): ヴァシリーナ・トムチェンコ(1945年12月7日生まれ)

祖父: アレクサンドル・トムチェンコ(1943年8月28日生まれ)

母(娘): ナターリヤ・フージェリ(1977年6月5日生まれ)

子(孫娘): タチアナ・フージェリ(1997年11月25日生まれ)

◎母親のナターリヤさん

「娘のタチアナは小さいころから頭が痛い、おなか痛い、脚の関節が痛いといっていた。この周辺では、弱い子が多い。隣の9歳の娘は腸のガンにかかったが、幸い今も生きている」

◎孫のタチアナさん

「確かに健康じゃない子が多くて、よく風邪をひく友達が多い。今年の冬も2回学校が閉鎖されるくらい多くの生徒が休んでいた」

タチアナさんのクラスは19人。複数の村からスクールバスで通学し、学校全体で200人くらい。

家族7



祖母(母): ガリーナ・ヴァシキフスカ(1950年1月1日生まれ)

母(娘): マリーナ・ネブメルジツカヤ(1986年7月28日生まれ)

子(孫息子)1: セルゲイ・ネブメルジツキー(2007年6月4日生まれ)

子(孫息子)2: マクシム・ネブメルジツキー(2008年10月6日生まれ)

【アパート2階に住む脚の痛い祖母と孫】

田舎の村ではめずらしい二階建ての集合住宅。建物入口前には小さなぶどう棚。その下にはベンチが2つ置かれていた。

◎祖母のガリーナさんは事故後、5月16日に他の妊婦たちと一緒にキエフへ向かい、そこで娘のマリーナを出産した。8月にラディンカ村に戻る。甲状腺に問題があり、1990年に手術。現在も甲状腺3級に認定されている。

検査はキエフの内分泌研究所で行われている。

事故後は精神状態もよくなく、人がいないのに居るといったり、混乱していると言う。

◎娘のマリーナは、小さいころから風邪をひきやすく、13歳の時にボトキン病（肝臓炎の一種・ウイルス性肝炎）にかかった。胃腸も弱く、アレルギーもある。

◎5歳の孫のセルゲイは、心臓に雑音があるといわれたことがあるが、その後、特に大きな問題はない。しょっちゅう鼻水を出し、扁桃腺が腫れる。

◎4歳の孫マクシムは、2年前に右の肺炎にかかった。体が弱い。

祖母の話によると、2人の孫は共に脚が痛い。孫は、天気が悪くなると膝の痛みを訴えるという。4歳と5歳の子どもが「膝が痛い」と言うのは異常である。

シャガイモ、ニンジン、大根、イチゴ、ベリー、キャベツ、たまねぎ、ニンニクなど、地元の食べ物を食べてきたので、放射能による内部被曝の影響が考えられるが、遺伝的な影響も疑う必要がある。

家族8

祖母：マリーヤ・ヴォイテンコ(1964年3月6日生まれ)

母(娘)：ナターリヤ・ヤツェンコ(1986年3月29日生まれ)

子(孫息子)：ヴラジスラブ(2009年5月23日生まれ)

【30頭の牛を村人が交代で面倒みると言った家族。我々が訪ねると、赤ちゃんの父親は、恥ずかしがってバイクで出かけてしまった】

◎祖母マリーヤの話

事故直後の5月4日、ラジオで村の広場に朝10時集合との伝達があり、集まって、それから7時間かけてキエフまで避難した。生後2ヵ月に満たない娘ナターリヤを抱えて大変だった。



親戚がウズベキスタンに住んでいたので空港まで行ったが、飛行機に乗れなかった。8月20日までキエフ郊外の保養所にいて、9月1日の新学期までに村へ戻った。

頭痛、アレルギー、高血圧、白内障、婦人科の病気、繊維筋腫がある。

◎娘(ナターリヤ)の世代は健康がよくない。子どものころはすぐに風邪を引いた。

ナターリヤは、2年前から手足がむくみ、ずっと座っていると、動くとき足に痛みがでる。

◎孫のヴラジスラブは、風邪をひくとすぐに喉を傷める。

食事は地元産のものを食べてきた。事故の後もそうだし、今もそう。事故後4年間は牛を飼ってはいなかったが、今は、1頭の牛を飼っている。他にも飼っている人がいて、30頭くらいをまとめて草地までつれて行って草を食わせている。これを当番制のようにして順番に行っている。

家族9



祖母(母)：ガリーナ・レブリク(1965年2月20日生まれ)

母(娘)：タチアナ・シレンコ(1986年12月27日生まれ)

子(孫娘)1：アンナ(2006年2月24日生まれ)

子(孫息子)2：アルテム(2011年5月16日生まれ)

【祖母、母ともに足の痛みが強い】

祖母のガリーナはラディンカ村のコルホーズで働いていたが、妊娠していたので避難。一時ロシアに行ってからウクライナに戻って来た。キエフ郊外の保養所に滞在し、8月末にボレイシア村に戻って、病院でタチアナを出産した。

事故後、血圧が高くなり、心臓も弱い。3年前

から足の裏の痛みがひどくなり、足を着くと痛む。心臓もよくない。お金がかかるので病院では治療していない。

◎娘（母）のタチアナも12～13歳ころから扁桃腺が腫れるようになり、甲状腺異常とキエフの内

分泌研究所で診断され、3級と認定されている。血圧が高く、椎間板にも異常あり、歯に穴が開きやすい。

◎孫のアンナは、外に出ると必ず風邪をひくような状態で体が弱い。下の孫のアルテムは元気。

<6月1日（金）>

「子どもを守る日」に学校を取材

◎モジャリ村の学校

取材予定のビグニ村を目指していると、右手のきれいな教会の隣に学校があるのに気づく。



すでに夏休みに入っているが、「子どもを守る日」のため、子どもと先生が学校に来ていたので、取材することにした。

子どもたちがコンクールのための絵を地面に書いているそばで、先生方に話を聞いた。

ここは原発から直線距離で125kmぐらい。

年配の女性教師「事故後に子どもの病気が増え、入院する子も増えた。重い病気の生徒でキエフの病院まで行った例もある。ほとんどの子どもたちが健康を害している」

「村や学校は線量を計測していたが、最後は2006年か2007年だったと思う」

校舎の前で遊んだりコンクリート地面に白いチョークで絵を描いていた生徒たちに集まってもらった。



20人くらいに、「脚が痛くなる人は？」と質問すると8人くらいが手を挙げた。膝やくるぶし、脛などの痛みが長く続くと、子どもたちがジェスチャーで訴える。

ビグニ村の取材時間が迫ったとき、若い校長先生がやって来たので、お礼を言うと、「また、ぜひおいでください」と言われた。



【ビグニ村】

ビグニ村は、朝訪ねた学校がある第3級汚染地のモジャリ村からは9kmぐらい。

【3家族が集まって、昼食を準備しながら、家族ごとに取材に応じてもらった】

家族 10



祖母（母）：ガリーナ・クリーシ（1963年7月12日生まれ）

長男（息子）：アレクサンドル・クリーシ（1986年6月29日生まれ）

嫁：ガリーナ（1985年6月29日生まれ）

その娘（ガリーナの連れ子）ディアーナ・クドリャ
（2002年11月7日生まれ）

二女＝夫婦の娘（孫）クリスチーナ・クリーシ（2011
年8月8日生まれ）

・アレクサンドル以外に双子の子どもがいる。

【腰痛と頭痛のひどい祖母と脚の悪い息子】

◎祖母のガリーナは1986年4月26日の事故の日、
妊娠3ヵ月だったが、事故後、体調が悪くなり入
院した。そこでさらに悪化し、別の病院に転院し
て出産。息子のアレクサンドルは3600gで生ま
れたが1ヵ月で2900gになった。

出産後は頭痛がひどく、現在でもそれは変わら
ない。腰痛がひどく、膝関節はもちろん脚全体に
ひどい痛みがあり、背中も明らかにはって、
孫を抱くこともできない日が多い。

◎長男のアレクサンドルは、3歳のときに腎臓を
悪くして入院。子どものころから歯が悪く、現在
（25歳）で残っているのは前歯だけで上下左右の
奥歯は入れ歯。徴兵検査のときにさまざまな異常
が判明、心臓疾患、頭痛など。ふくらはぎが慢性
的に痛い。1995年に脊椎管ヘルニア。甲状腺異
常をサナトリウムで治療。肺がけいれんしたこと
がある。

◎アレクサンドルの妻ガーリャは、原発から45
キロの第3級汚染地の村から嫁いできた。体調が
悪く、歯も悪い。高血圧で鼻血がよく出る。

◎妻の連れ子ディアーナは、乱視、斜視で、毎年
入院する。歯も弱い。小さいころは歩くのも大変
なくらいだった。

◎赤ん坊のクリスチーナは、いまのところ大きな
問題はない。

【ビグニ村で大歓迎の昼食会】



■この村で取材に応じてもらった3家族全員で歓
迎の昼食を作ってくれ、大歓迎会となった。

家族 11



祖母（母）：ヴァレンチーナ・ボロベイ（1959年
7月9日生まれ）

長女（娘）：タチアナ・ルーチャイ（1980年3月
9日生まれ）不在

二女（娘）：レーシャ（1982年1月1日生まれ）

長男（息子）：アレクサンドル・ボロベイ（1986
年3月11日生まれ）

二男（息子）：イヴァン（1992年9月11日生まれ）
不在

子（孫息子）：レーシャの息子アルテム（2007年
2月10日生まれ）不在

【右脚にギプスの長男がいる家族】

◎祖母のヴァレンチーナは、事故のときは生後
1ヵ月半の長男を抱えて家事をしていた。左足が
悪く10年前に入院した。家に医者を呼んで注射
したり、民間療法でなんとか持たせている。12～
13年前（事故の13～14年後）から心臓が悪くな
り、7ヵ月前に心筋梗塞を起こした。

◎長女タチアナ（事故時6歳）は脚の様子がおか
しく治療を続けている。頭も継続して痛く、右の
胸に良性腫瘍（マストパチャ）があったという。

◎二女のレーシャは、胃の病気があり、薬の服用
による菌交代症にかかった。さらに子宮頸ガんで
1ヵ月入院した。

◎事故のとき生後1ヵ月半の赤ん坊だった長男の
アレクサンドルは、4歳のときに喘息になり、6
歳でいったん快復した。しかし、サッカーも十分
にできないほど体が弱く、10年前には両方の肺
炎をわずらった。学生時代から心臓も悪くなり、

現在も胸が痛い。脚も非常に痛く、右足首にギブスをしている。指も曲がっている。1996年にキューバに行って歯と気管支炎の治療をしたことがある。



◎二男イヴァンは臍帯ヘルニア。黄疸が出たこともあるという。

◎孫：長女タチアナの息子アルテム（5歳）は、新生児のときは弱く、黄疸がでて、点滴を受けて、特別の保育器に入れられた。4ヵ月で肺炎。その2ヵ月後にまた肺炎。今は慢性の気管支炎。膝から下が痛いという。

◎長女タチアナの夫バシーリー・ルチャイ（1977年3月20日）は、この村で生まれ育った。軍隊時代の病院で血液に問題にあることが判明し、手足や背中への痛みがひどいという。

◎祖父（ヴァレンチーナの夫）は、原子力関係の仕事をしていた。

家族 12



祖母（母）：ヴァレンチーナ・ヴォロベイ（1966年2月1日生まれ）

長女（娘）：エレナ（1986年8月21日生まれ）

二女（娘）：リュボフ（1989年1月3日生まれ）不在

子（孫息子）（リュボフの息子）マクシム（2010年10月30日生まれ）不在

【二女とその息子も病氣（取材時に不在）】

◎祖母のヴァレンチーナは事故のとき、隣の入口

ヴェチノ村の縫製工場で働いていた。どこにも逃げなかったので、医師から中絶を勧められたが、彼女の親が「最初の子だから中絶など考えられない」と主張し、ヴァレンチーナはそれに従った。

事故後は頭痛、関節痛が起こり、血圧にも問題があり、腎臓をわずらった。1997年頃にはそれが悪化した。今は繊維筋腫もある。

◎生まれた長女のエレナは2000gと小さく、すぐに1800gに落ちた。卵巣や腎臓に問題あり。今も走ることができず、ゆっくり歩けるだけ。2ヵ月前に悪化し、血圧も下がっている。

◎二女のリュボフは、母と姉の話によると、医師に中絶するように言われたが、マクシムを産んだ。2008年か2009年にガン手術をし、菌交代症にかかったという。

◎孫のマクシム（リュボフの息子）は、アレルギーで弱いという。



●マッサージ

3家族のほとんど全員が、腰、足などが痛いというので、小若ガリーナ・クリシさんと息子のマッサージをした。



【体のガチガチと心筋梗塞】

この祖母は49歳なのに、全身が固まっていてガチガチ。ツボを軽く触っただけで悲鳴を上げる。こわすといけないので、10歳の孫娘に足の裏のツボを押させたが、やはり悲鳴を上げ続けた。

放射能による内部被曝の影響が筋肉や関節に出ているのではと感じた。

これだけ全身が固まっているのに、心臓だけ

が柔らかく動き続けられたら、その方が異常である。体の固まり方から考えて、若くして心臓病で亡くなる人が多いのも納得できた。

学校を計測

取材を終えてから学校に戻り、線量を計測すると、校庭は、1時間当たり平均0.21 μ Sv/h（マイクロシーベルト）だった。

国は、年間20mSv以下なら「放射能の健康影響はない」と言っている。ガンなどの特定の疾患

が出ることを証明できなくなったのを「健康影響はない」と言い換えるのは科学的に間違いで、詐欺師のようなものだが、それはさておき、いま危険性が確認されている放射能の最低レベルは1時間当たり2.28 μ Sv/hになる。

校庭の値は十分に低かったのだ。

だが、校庭の線量だけで、モノを言うわけにはいかないの、学校に通う子どもたちが住んでいる地域の線量を測定することにした。その結果は15ページに回し、家族の取材報告を続ける。

<6月2日(土)>

【スロヴェチノ村】

家族 13



祖母(母)：タチアナ・レドチツ(1966年3月21日生まれ)

母(娘)：アーラ・オレフノヴィッチ(1986年3月31日生まれ)

子(孫娘) 1：カリーナ(2007年12月10日生まれ)

子(孫息子) 2：アレクセイ(2009年1月4日生まれ)

※祖母のタチアナには、このほか2人の娘、1人の息子がいる。

【全員が病弱な家族】

◎祖母のタチアナは、このスロヴェチノ村から60km離れたオブルチ地区ノーブルニヤ村にいた。

事故後に避難はしなかった。

1995年に心臓の痛みで気を失った。

2000年に病院で甲状腺異常だと告げられ、ホルモン剤治療を行った。

2007年に頭をケガし手術。指の痛みや足の痛みがひどい。足は、ときどきけいれんする。

◎長女アーラは、幼稚園の健康診断で貧血だとわかった。10歳過ぎに腎臓が悪く入院。その後、成人して妊娠したときも腎臓が悪く入院したことがある。

喉の炎症があり、心臓も悪くカルジオパーチと診断された。15歳のときは足のひどい痛みを経験した。今も心臓がおかしく、膝が痛む。

◎孫カリーナは、アレルギーがあり風邪を引きやすい。特に気管支が弱い。

◎孫アレクセイも、アレルギー(特に魚)があり、風邪をひきやすい。

孫の2人は、とてもおとなしく、弱々しい感じがした。

【タチアナ家で昼食】

【リストヴィン村】

家族 14



祖母(母)：ニーナ・ノリンシャク(1960年9月19日生まれ)

祖父：ヴァシーリー・ノリンシャク(1959年1月1日生まれ)

息子：セルゲイ・ノリンシャク(1986年9月3日生まれ)

息子の嫁：アーラ（1987年10月11日生まれ）
子（孫息子）1：アルテム（2007年2月1日生まれ）
子（孫娘）2：ポリーナ（2009年7月22日生まれ）

【看護師の家族は元気そうに見えたが】

◎祖母ニーナは、病院で看護師として働いていたが、1986年の事故のときは、妊娠中で家にいた。当時は妊婦に対して中絶しろという圧力があつた。出産後は、子どもを外に出すなど指示を受けた。食事は自家栽培のものを主に食べた。

事故後、出産。その後、急激に太った。

甲状腺異常はない。

15年前から膝が痛みだし、3年前から腰が痛い。婦人科では2000年ごろから繊維筋腫がある。

◎息子セルゲイは6年前に咽頭扁桃増殖症（アデノイド）で手術。目が悪い。

◎妻アーラは、同じ村出身で、小さいころから弱かった。とくに気管支炎。2人の子どもは帝王切開で産んだ。2年前から背中が痛い。

◎孫のアルテムは手が腫れたことがある。アデノイド症の手術をしている。

◎孫のポリーナは、これまで肺炎を2回患った。

◎祖父ヴァシーリーは、森林の仕事をしており、事故後も森に出て仕事をしていた。肺炎を何度も起すようになり、2000年ごろから毎年のように肺を傷める。今年1月19日に心筋梗塞を起こした。

<6月3日（日）>

立ち入り制限区域での撮影

この日は、調査報告のビデオ作品を制作するための撮影日。

立ち入り制限区域の検問所前でオリガ・セレコエスカさんと娘のヴァシリーナ・リトビネンコさんと落ち合う。

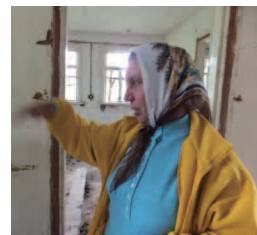
書類はそろっているのに、兵士は「見たことがない」と言い、2時間ほどトラブルになる。



【高線量を示した場所】

彼女らが事故前に住んでいたノーヴイミール村を訪ね、今は廃屋になっているかつての住居や思い出の場所を歩いた。

かつて住んでいた家を訪れたオリガさん



彼女らは、この地区から移住して、今はコヴァリン村に住んでいる。そこから、案内役であるタチアナさんのご主人が自分のクルマを運転して連れて来てくれた。タチアナさんたちも、この地区から移住してコヴァリン村に住んでいる。

【ノーヴイミール村の廃屋】



立ち入り制限区域に入ると、道路のわきに廃屋が見え、放射能測定器がときどきピーピー鳴るので、0.3 μ Sv/hを超えている場所があり、最高値は7 μ Sv/hだった。

タチアナさんが結婚式を挙げたホールも今は廃墟



<6月4日（月）>

キエフのボリスピリ国際空港へ。帰国の途へ。

<6月5日（火）>

成田空港着。

学校に通う子どもが住む地域を計測

ウクライナの田舎では庭に数百坪の菜園があり、近くの森に行って、野生のキノコやベリー類をとってきて食べるのも、当たり前に行われている。

この地域の食料自給率は100%に近い。

取材予定のない朝と夕方の時間帯を利用して、村の外側にある牧草地や穀倉地、家の自給菜園に入らせてもらい、20カ所で線量を測定した。

この写真には誤差1mのGPSデータを入れたつもりだったが、入っていなかったので、場所の正確な特定は9月の再訪ツアーを期待していただきたい。

20カ所の平均値は0.115 μ Sv/hとなった。日本の放射線管理区域は3ヵ月で1.3mSv以上。1時間に換算すると約0.6 μ Sv以上の場所だが、

この4分の1の地域でも、自給生活をすると、子どもに健康障害が出る事が判明した。

福島では、0.115 μ Sv/hを超えている地域が多い。だから福島で自給的な農業を行うと、子どもにも被害が出る可能性がある。

日本政府は、ウクライナで子どもの健康調査と、食品の放射能調査を行って、現地の住民の健康を守ることに貢献しながら、その情報をもとに日本の農作物の作付制限を行ったり、食品の放射能基準を強化したりしなければ、日本国民の健康を守ることができなくなった。



キノコが生えている



■参加者募集・魅力的に内容を改訂中

2号炉運転室が見られる！ チェルノブイリ原発視察&民間交流ツアー

(9月24日～10月1日着)

2号炉は今、解体中です。運転室の見学は9月末なら大丈夫と連絡が入りました。今回が見学できる最後のチャンスです。

ウクライナで唯一、胎児の放射能被害を研究し、子どもの治療している医師の講演会が新確定。

第3級汚染地域の学校を訪問し、子どもたちに直接、体調を聞く機会を持ち(交渉中)、その地域を回って線量測定を行う予定です。

●参加費：1人36万8000円(ご夫婦や友達などで2人1室の場合32万8000円)

●定員：30人(先着順)

◆9月24日(月) 成田空港 10時集合

・23時ごろにウクライナ・キエフ着

◆9月25日(火)

・子どものガン治療援助団体「ザポルーカ」の本部事務所で寄付金6000ドルを渡し、病院事務所、「家族の家」を訪問。

・ナターリヤ・オニプコ会長講演

・病気の子や母親と交流&バイオリンコンサート

◆9月26日(水)

・胎児の放射能被害を研究するウクライナ唯一のロガノフスカヤ医師講演

・2号炉で緊急処理に当たったアンドレーエフ氏(チェルノブイリ連盟代表)の講演

・アンドレーエフ氏やチェルノブイリ連盟代表のスタッフ・家族を招いての懇親会

＜ここまでキエフに宿泊＞

◆9月27日(木)

・チェルノブイリ原発：2号炉内部視察。

立ち入り制限区域のゴーストタウンなどを視察。

＜オブルチ市宿泊(原発から西に90km)＞

◆9月28日(金)

・第3級汚染地域の学校で先生・生徒らと交流(交渉中)

＜オブルチ市宿泊＞

◆9月29日(土)

・汚染地から住民が移住した非汚染地のコヴァリン村に行き、病気の子・孫を抱える家族の話を聞き、交流会。

＜キエフに戻り宿泊＞

◆9月30日(日) 昼、帰国の途へ

◆10月1日(月) 成田空港 11時着・解散

*帰国後、すぐに記録のDVDを作成し、参加者全員に1枚を差し上げます。

この取材費には、カンパを使わせていただきましたので、使った金額の内容を報告いたします。

ウクライナ会計報告 (2012年5/27～6/5)

航空運賃	448,010円
現地交通費	107,966円
宿泊代	203,534円
飲食代	56,487円
手土産代	8,788円
通訳、汚染地立入許可費、謝礼等	317,356円
「ザポルーカ」寄付	502,740円

経費合計額 1,644,881円

(4月の円高の日に1ドル=83.79円で交換していました)

●林 克明氏・趙 華行氏の人件費は、安全基金が支出しています。

●取材でインタビューさせていただいたすべての女性(学校を除く)に土産として80本の淡水パールを渡し、大変喜ばれました。これは通販会社「安全すたいる」から無償提供されたものです。

チェルノブイリの子どもと 福島の未来の子どもを救う カンパのお願い

「放射能から孫を救う基金」
郵便振替口座：00160-3-512738
加入者名：食品と暮らしの安全基金